

[渡辺始興展によせて]

## 渡辺始興と乾山焼

多くの画史や画論書には、渡辺始興は一時期、尾形光琳に学んだと記されています。確かに、始興は光琳に倣う作品を多く描いていますが、現在のところ、光琳と始興を直接結ぶ資料は残されていません。ただし、弟の乾山との関係は指摘されています。根津美術館に所蔵される「銕絵蘭石角皿」の裏には、乾山自身による次のような銘文があります。「表書一連者迂叟勞倦之時使画師渡辺素信書者也最勝迂叟筆跡云爾 乾山深省書」。すなわち、「一連の表の絵は私が疲れた時に絵師、渡辺素信にかかせたが、むしろ私よりもすぐれている。」という意味です。「一連」と記されていますので、この角皿も他の多くの乾山焼の角皿と同様に、組物として制作されたことがわかります。また、「勞倦之時」という記載から、渡辺素信が絵付をしたのはこの作品だけではなさそうです。素信が始興を名乗る以前の画号とすると、当然、兄の光琳とも接する機会があったと考えられます。この作品の他にも、山水図の絵付けに「素信」の朱文方印を捺し、乾山が賛を記した「山水画賛軸盆」が紹介されています。

乾山焼の絵付は、乾山自身によるもの、兄の光琳によるもの、専

門絵師によるものと概ね三種に分類されています。この専門絵師が絵付したと考えられている乾山焼の中に、始興作品が含まれている可能性があります。「銕絵山水図八角皿」（以下、八角皿と記す）もその一つです。この作品では、八角形の器形に応じて、楷体の山水図を手際よくまとめています。筆致の小気味よいリズムや、下方中央に大きな岩を重りのように据え、遠山を低く設定して空間を引き締める画面構成には、始興作品に通じる特色が認められます。

始興はこの中景に置かれた斜めに傾く岩山をしばしば描いています。例えば、「赤壁図」にも見られます。この作品の山水表現は、八角皿の中景を右奥にスライドさせたようです。こうして、画面の中央に空間を大きく開き、中国の宋時代の詩人、蘇軾の乗る舟を浮かべています。下方中央の岩や低い遠山の設定も八角皿と同様です。また、両作品の岩山を比較しても、全体の形や岩山の線描、点苔の打ち方など、非常によく似ています。基本的な画面構成や細部描写には、同じ作者の作品と考えるに十分な共通性が認められます。

しかし、若干の相違もあります。「赤壁図」では作品の構想がより複

銕絵山水図八角皿 尾形乾山作 個人蔵



銕絵山水図八角皿(部分)

雑なことはもちろん、輪郭線が多様になり、筆致もより明快になっています。岩山の表現においても異なる点が認められます。八角皿の岩山は牡蠣殻のような形ですが、「赤壁図」には丸みが表われ、中央の前に出る岩壁をやや右にずらし、陰影を岩の下方に施すことで、膨らむような量感が表われています。

おそらく、この相違は制作時期の違いを示すと思われる。「赤壁図」には伊藤蘭嶋が寛延二年(1749)の冬に画賛を記しています。この年に始興は既に六十八才です。追賛の可能性を考慮しても、六十才台の作品と考えられます。一方、八角皿は乾山焼の中でも上作の部類に属します。鳴滝齋で制作したとすると、二条丁字町に移転し、借り窯時代に入る正徳二年(1712)以前、始興三十才以前の作品となります。そうすると、両作品の制作時期は四十年近く離れます。八角皿と「赤壁図」の作風の相違はその間の様式展開の跡を示すこととなります。

MOA美術館に所蔵される「色絵定家詠十二月歌絵角皿」も始興が絵付した可能性があります。この作品は十二枚組になっており、

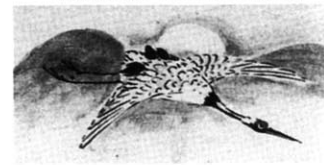
赤壁図(部分)



赤壁図(部分)

それぞれの裏面に月次の花鳥を詠んだ和歌二首が記され、表には和歌にちなむ色絵が絵付けされています。その十二月の裏面に「元禄十五のとし十二月朔日乾山陶隠深省書(花押)」という落款があり、元禄十五年(1702)十二月一日に造られたことがわかります。乾山焼でも最も初期の作品です。和歌は乾山が記していますが、表の絵付は乾山とも光琳とも異なります。一貫した画風から、狩野派の描法を身につけた専門絵師が一人で描いたと考えられます。この十月の角皿に描かれる鶴と「赤壁図」の鶴には、飛ぶ方向が異なるものの、羽の描写や瓢逸味のある表情など非常に近い表現が見られます。この年に、始興は二十才です。この絵師が始興とすると、八角皿とともに貴重な二十才台の作品になり、既に、八角皿の山水図から、この作品の大和絵まで幅広く描いていたことがわかります。おそらく始興は乾山焼において、乾山や光琳の不得意な分野を町絵師として補っていたのでしょう。光琳とともに絵付に携ることで、光琳の作風を自然に学んだものと思われま

(中部義隆)

色絵定家詠十二月歌絵角皿  
十月(部分) MOA美術館蔵

赤壁図 渡辺始興筆 個人蔵



季刊 美のたより No.132

平成12年10月1日

発行 大和文華館